

# 「近代日本文学におけるイメージと文学の関わりについての研究」ワークショップ

"A Study on relationship between image and text in Japanese modern literature" workshop

林 恵美子<sup>1</sup>, 若林 綾<sup>1</sup>, 五味 澁 典嗣<sup>1</sup>

大妻女子大学大学院人間文化研究科

Emiko Hayashi<sup>1</sup>, Aya Wakabayashi<sup>1</sup>, and Noritsugu Gomibuchi<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Department of Human Culture Graduate School of Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード: 映像, 挿絵, 演劇

Key words : A screen image, Inserted within text, Drama

## 抄録

平成 25 年 2 月 8 日, 人間生活文化研究所大学院生共同研究プロジェクト「近代日本文学におけるイメージと文学の関わりについての研究」は, 研究成果を報告するワークショップを開催した。「文学」と「イメージ」が取り結ぶさまざまな関係性をめぐって, 「文学」と挿絵, 「文学」と演劇, 「文学」と映画に着目した三つの報告とディスカッションが行われた。

### ○林恵美子「描写と裏切り—挿絵から読む『痴人の愛』—」

林が取り上げたのは, 谷崎潤一郎『痴人の愛』である。『痴人の愛』は 1924 年 3 月 20 日から 6 月 14 日まで「大阪朝日新聞」朝刊に掲載され, 休載を経て, 同年 11 月からプラトン社『女性』11 月号から翌年 7 月号に掲載された。新聞連載時は, 田中良による挿絵が加えられていた。新聞連載小説が雑誌連載小説や単行本と大きく違うのは挿絵が付されること, 記事や広告とともに掲載されることである。当然読者は記事, 広告, 本文, 挿絵を目にすることになる。そのため, 本報告においては, 今まであまり論じられることがなかった挿絵や記事, 広告に注目しながら『痴人の愛』を再考した。

挿絵で重要であるのは, 主要登場人物がいかに関像化されるかである。田中良による挿絵では, 譲治は新聞の主な読者層である新中間層の男性に重ね合わせた形で描かれている。ナオミの描写は譲治と出会った頃からだんだんと表情, 服装ともに段々とハイカラに変化していくものの, 徐々にそのハイカラさが描かれなくなるところに挿絵と本文の描写とのずれが指摘できる。この葛藤と描写のあり方に新聞連載小説『痴人の愛』への新聞社の期待と裏切りが見て取れる。

しかし, 新聞から婦人雑誌へと発表媒体が移行したことは, 『痴人の愛』そしてナオミ像が女性に求められたことを示している。『痴人の愛』はメディアによって見せるイメージを変化させており, その点から『痴人の愛』の需要と新たな『痴人の愛』イメージを結ぶことができるのである。

### ○若林綾「物語の再構築—1950 年代の小説群と安部公房スタジオ—」

若林は 1973 年に立ち上げられた「安部公房スタジオ」に 1950 年代の安部の小説が多く再演されていることについて問題提起し, また, 「安部システム」と呼ばれるスタジオ独特の演技方法について分析した。

「安部公房スタジオ」で上演された作品は 9 作, そのうち 6 作が 1950 年代に書かれた小説を戯曲に直したものである。物語はそれぞれ, 新たなテーマやモチーフを埋め込まれ, 70 年代のよそおいへと変わっていた。例えば, 『友達』では新たに「都市」というテーマや, 「団地」という, 時代を表すモチーフが取りこまれた。他に, 演劇にするにあたって, 全ての物語内容が, 小説よりずっと分かりやすくなっていること, 同時期に刊行された小説とテーマが似通っていることなどが指摘された。

また、「安部公房スタジオ」で行われた演技方法を「安部システム」と言い、これは東京大学医学部を卒業した安部ならではの考え方に基づいている。例えば、「笑う」を演じようとする時に、俳優は模倣や感情移入をすることをしてはならない。安部のスタジオに所属する俳優達は、腹筋を痙攣させ、顔の筋肉を動かさずといったような、生理的な方法で、物語の中に入って行く。こうした訓練によって俳優達は、模倣ではなく、本当に「笑う」ことが可能になるというのだ。俳優達が本当に「笑う」ことによって、観客達も、それが現実のように思えてくる。これは、演劇と観客席を近づける装置ではないのか。

以上、発表には二つのテーマが混在しており、若林はこの後、まだまだ不明なところの多い、「安部システム」について、分析を深めていくこととした。

### ○五味淵典詞「〈国策〉と〈娯楽〉のあいだ——『蘇州の夜』をめぐって」

五味淵は、川口松太郎が原作を執筆し、松竹が1941年に製作した映画『蘇州の夜』に注目した。前年に東宝が製作・公開した長谷川一夫・李香蘭主演『支那の夜』の成功を受け、いわば「二匹目のどじょう」を狙って製作されたこの映画は、紅野謙介が「ご都合主義の日本の独善的なメロドラマで、論評に値しない」と酷評している通り、あくまで基本的には通俗的なメロドラマであり、佐野周二演じる日本人医師・加納が、持ち前の誠実

さで、李香蘭の演じる中国人女性・梅蘭の心を少しずつ開いていくという内容は、当時の日本が国民に納得させたがっていたイデオロギー的な物語を踏襲するものでしかない。

しかし、この映画には同時に、二人の距離にかかわって「扉を開ける」「窓を開ける」場面を隠喩的にちりばめたり、「和解」を果たした佐野周二と李香蘭との「結婚」を象徴的に示す表現が用いられていたり、それなりに繊細な表現技法が駆使されている。このことは、当時の日本映画が、通俗的なメロドラマを語る語法を確立し、洗練させていたことをうかがわせる。確かに、『蘇州の夜』の物語は、日中戦争当時の（日本にとって）望ましい中国との関係を表象する紋切り型を出していない。だが、その紋切り型がそれなりのレベルでファンタジーとして語られたとき、この映画の観客たちに、どのようなイメージが受け渡されることになるのだろうか。この作品は一例に過ぎないが、1930年代後半から1940年代にかけて製作された日本映画における「プロパガンダ」のありようについては、物語の内容的な分析にとどまらず、物語の語り方、イメージの提示のしかたについても着意した検討が求められるのである。

### ○付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(D015)の助成を受けたものである。

### Abstract

On February 8th 2013, we held the workshop as a result presentation of the graduate student's research project "A study on relationship between image and text in Japanese modern literature". We focused on the newspaper novels, dramas and movies related to literature, we proved that audiences were influenced by the images which made by mass media and we studied how authors made their works using that image.

(受付日：2013年12月31日、受理日：2014年1月20日)

林 恵美子（はやし えみこ）

現職：大妻女子大学大学院人間文化研究科言語文化学専攻修士課程

大妻女子大学文学部日本文学科卒業。

専門は近現代日本文学。人間生活文化研究所共同研究プロジェクトでは、特に谷崎潤一郎『痴人の愛』と初出掲載紙「大阪朝日新聞」に掲載された挿絵や記事、広告とのかかわりに着目し、研究を行っている。

主な口頭発表

第17回谷崎潤一郎研究会 個人発表「描写と裏切り—挿絵から読む『痴人の愛』—」（谷崎潤一郎研究会，平成25年3月16日）

日本近代文学会春季大会 個人発表「文章と声のあいだ—谷崎潤一郎『文章読本』をめぐって—」（日本近代文学会，平成25年5月26日）

主な論文

「描写と裏切り—挿絵から読む『痴人の愛』—」（『大妻国文』45号，大妻女子大学国文学会，平成26年3月）掲載予定。